

研究展望(平成9年)

著者	山中 玲子
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	24
ページ	1-15
発行年	2000-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020536

研究展望（平成九年）

山中 玲子

『能楽ジャーナル』25号（98年9月）掲載の表章氏「『能楽博士』輩出のことなど」に拠れば、平成八、十年の三年間に能・狂言の分野で博士号を授与された者は十名に及ぶという。この十名の大半は、戦後の能楽研究をリードしてきた先生方から直接間接に教えを受けて勉強してきた、いわば「弟子」たちの世代に属するが、この世代の中には既に大学院の学生を指導している人も多くなり、その結果、能楽研究所を利用する若い大学院生の数も以前とは比べものにならないほど増えている。和歌や物語文学などには及ばないが、能楽研究も国文学の一分野としてそれほどマイナーな、特殊な分野ではなくなってきたことはたしかなようである。

だがもちろん、能楽は国文学の一分野であるだけではない。平成八年から始まった「世阿弥忌研究セミナー」には国文学・比較文学・国語学・哲学・美学・音楽学等々、様々な分野で能を研究対象としている人、それに能や世阿弥に興味を持つ、研究者以外の人々が、年齢的にも長老から大学院生まで幅広く集まる。このセミナーは今のところ、対象を「世阿弥」に絞っているが、より広く能・狂言全体の問題を扱えるようになるれば、さらに多くの人が様々な分野から参加することが可

能になる。能楽学会がそろそろ設立されてもよい頃だという話はよく聞くし、前掲の表氏稿の結語でもあった。能狂言をめぐる多様な問題に多方面からアプローチでき、しかも研究成果の発表・交換の場としてきちんと機能するような学会がどの程度可能なのかよく判らないが、個人的には「世阿弥忌セミナー」のような形が一つのモデルになるのだろうかと感じている。

さて、本稿の担当は平成九年だが、この年は、能狂言の研究者にとって必携とも言うべき単行本が多く出版された年であった。論文も色々な方面から数多く発表されている。関連分野も含めれば膨大な数になるそれら全てに触れる能力も紙数も無いが、以下では限られた範囲ながら、同年に発表された諸論考を紹介し、併せて気づいた点などにも触れていくことにする。

単行本

『驚流間』（佐渡鷺流狂言研究会編。A5判680頁。1月。佐渡鷺流狂言研究会発行。非売品）

佐渡島内の安藤春雄家（両津市）、若林義太郎家（真野町）、

天田保家(岡津市)が所蔵する鷺流間狂言台本の翻刻。所蔵者の事情によりごく少数部を作成し、佐渡鷺流狂言研究会の会員など少数の関係者と、関係研究機関に配布したもの。

『観世文庫蔵 室町時代謡本集』(表章編。観世文庫発行。B5判。影印500頁、翻印548頁。3月。非売品)

影印篇(一部カラー)と翻印篇の二冊に分かれ、同文庫蔵の室町時代書写謡本のうち97種を紹介。影印編17頁上段の写真が16頁下段のものと重複しており本来の写真が欠けていたが、平成十一年三月発行の『花伝』4号に添えて、張り替え用の正しい図版が配布された。簡単に見ることのできなかった同文庫蔵の貴重な古写謡本が鮮明な写真と正確な翻印とで読めるようになったのは非常にありがたいが、それだけに、非売品であるのが残念。

『金春禅竹自筆能楽伝書』(国文学研究資料館影印叢書第二巻。国文学研究資料館編。B5判44頁。3月。汲古書院。一六五〇円)

能楽シテ方金春流の金春欣三氏より国文学研究資料館に寄贈された禅竹自筆伝書『五音之次第他』『五音三曲集』『六輪一露之記他』(紙背『歌舞髓脳記』草稿)を、影印と翻刻で収める。翻刻と解説は樹下文隆氏。『金春古伝書集成』に翻刻されている八左衛門本の誤写が訂正でき、また、多数の削除・訂正・増補から、禅竹自身の推敲の様子も窺える点で、これら自筆本出現の意義は大きい。なかでも『歌舞髓脳記』草稿本が与えた衝撃は大きかった。草稿本は従来知られ

ていたいわゆる「精撰本」にくらべて所収曲の数がはるかに多く、〈濡衣・竹雪〉等、本資料の出現によって新たに禅竹時代の成立が確認された作品もある。草稿本に記されていた各曲についての見通しや、草稿本から精撰本に至る禅竹の思考の変遷をたどる試みは、本資料の発見に深く関わった樹下好美氏が、平成九年五月中世文学会春期大会で発表。平成十年の『中世文学』43号所収の同氏の論文「禅竹自筆『歌舞髓脳記』草稿の新出記事めぐって」を参照されたい。

『明治の能楽(四)』(倉田喜弘編著。国立能楽堂調査養成課編集。A5判526頁。3月。日本芸術文化振興会。二五〇〇円)

明治時代の新聞・雑誌から能楽関係の記事を抽出した記録集の最終冊。明治四十年から四十五年までの分。第一部「能楽界の動向」第二部「黒川能 幸若 今様能狂言」第三部「補遺」から成り、収載資料一覧・事項索引・一般人名索引・能楽師初出一覧を付す。東京毎日新聞の五流能開始、能楽界の楽士養成開始、『能楽新報』『能楽画報』『能楽時報』の相次ぐ発刊など、新たな動きが伝えられる。改訂謡本刊行から観世喜之破門に至る事情、観世梅若分流問題などをめぐる記事も多く収められている。

『早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録5 貴重書能・狂言篇』(竹本幹夫監修 早稲田大学演劇博物館編。B5判386頁。3月。三〇〇〇円)

早稲田大学演劇博物館所蔵能楽関係文書の解題付き目録。

謡本・注釈・伝書・付・史料・雑書・狂言の各部に分ける。解題は、他所蔵の諸本にも広く目を配り、ときには成立論にも踏み込む詳細なもの。書名索引・曲名索引付き。

『河内屋年代記』(大谷女子大学資料館報告書第36冊。山中浩之翻刻・解題。大谷女子大学資料館編。B5判123頁。3月)

中世末に寺内町として成立し近世には在郷町として栄えた大ヶ塚の旧家、河内屋代々の記録を地域の歴史とともに記したものである。内容は天文元年から明和元年に及ぶ。解題によれば河内屋の代々は能に深く関わり、筆記者の一人である二代目五兵衛は金剛又兵衛の門弟として翁をはじめ数々の伝授を受けてもいる人物。演能記録を初め、能に関する記事も豊富。

『世阿弥自筆能本集』(表章監修・月曜会編。A5判。影印140頁、校訂302頁。4月。岩波書店。一三〇〇〇円)

影印篇と校訂篇の二分冊。影印篇では、朱筆は朱で印刷し節付等と見まがう料紙の汚れは極力消すなど、原本を実際に見るのと近い形をめざし、校訂篇は、見開きの右に忠実な翻印、左側に校訂本文を対照させて載せる。校訂篇冒頭には、表章氏「序に代えて―世阿弥能本の翻印・校訂をめぐる難問二つ―」を収め、難読文字「ヲ」の読み方とマ行音ハ行表記の処置について、同書の立場とその根拠を明確に説明する。発行後四ヶ月足らずの八月八日に行われた世阿弥忌研究セミナーでは、既に同書を利用した研究が二本発表されていた。今後とも能楽研究の根本資料の一つとなっていくことだろう。

『未刊謡曲集 続二十』(古典文庫。田中允編。新書判542頁。4月。会員頒布)

続十九までの遺漏曲や異本など〈さね時〉から〈逢坂物狂〉までの一八番の翻刻と「謡曲名寄一覧 上」(ア・サの分)を収める。名寄一覧は、角洲本番外謡曲二冊、『未刊謡曲集』正統五二冊所収曲の曲名索引をも兼ねる。

『未刊謡曲集 続二十一』(古典文庫。田中允編。新書判486頁。12月。会員頒布)

最近の新作と異本・改作本の追加曲五番(永訣の朝・女沙汰・唯摩居士・行家・実朝)の翻刻と「謡曲名寄一覧 中」(シ・マ)。

『能・狂言研究―中世文芸論考―』(田口和夫著。A5判二二二頁。5月。三弥井書店。二八〇〇〇円)

全千頁を越える大著である。新出資料に基づいた貞和五年棧敷崩れ田楽をめぐる落書についての論、能〈自然居士〉の作品研究、天正狂言本に関する論等、長編にやはり読み応えがあるが、どんなに短い小論でも必ず何か新発見や新しい視点があるのが田口氏の研究の魅力ではないか。実証はできないけれどもこういう可能性もあるのではないか、という形で魅力的な仮説を示してくれるものも多い。なかには反論の多い仮説もあるだろうが、説話や御伽草子、日記等々に常に幅広くアンテナを張り、そこに引っかかってくるものを使って新しい読みを示す田口氏の方法に、研究の楽しさを教わった後進も多いと思う。巻末に鷲流最古の台本である『延宝忠政

本』の影印を付す。

『中世史劇としての狂言』（橋本朝生著。中世文学研究叢書5。A5判438頁。5月。若草書房。一三〇〇〇円）

書名にもはっきりと現れているように、狂言には中世の史実が反映しているという視点から書かれた論文が集められている。I「中世史劇としての狂言」では、狂言の演技・演出や、作品に現れる悪党などの問題を中世史との関わりで論ずる。Ⅲ「狂言とその周辺」に収められた「狂言と俳諧連歌」は、狂言に現れる俳諧連歌を網羅的に調査し、俳諧連歌に関わる狂言の成立時期や作者の問題にまで行き着く。付録の「狂言台本・曲目所在一覧」は、現存の本狂言台本に書誌的解説を加えて掲げ、各台本に収められた曲目を五十音順に配列してその所在を示した力作。今後、狂言の作品研究をする場合には必ずこの一覧を参照するようになるだろう。

なお、橋本氏が田口氏の著書の評を『能楽タイムズ』546号（9年9月）に、田口氏が橋本氏の著書の評を『楽劇研究』5号（10年3月）に書き、また、両氏の著書に収められた主な論考を取り上げ論評しつつ狂言研究全般の課題を論じた、稲田秀雄氏「最近の狂言研究―橋本朝生氏・田口和夫氏の著書を中心に―」（『芸能史研究』146号）もあるので、併せて参照されたい。

『近世の能楽』（狩野滋著。B6判444頁。7月。わんや書店。三六〇〇円）

第一部は、江戸随筆を中心に様々な近世文学に現れる能楽

関連の記事を調査・整理し、わかりやすい口語訳で示す。平成元年に同じ著者が出版した『江戸と能楽』の続編のような形。第二部は、室町から江戸時代末までの狂歌の中で能楽になんらかの関連があるものを集めて一首ずつ解説を加える。江戸時代の能楽のことを知るには同時代の随筆などをこまめに読んでいかねばならないと承知してはいても、実際はなかなか手が回らない。随筆等の引用は現代語で意識されているが、各記事の後に出典がきちんと掲げられているのも便利で有り難い。

『世阿弥の能』（堂本正樹著。新潮選書。B6判208頁。7月。新潮社。一〇〇〇円）

世阿弥関係の能二十三曲を十五章に分け、それらの作品と世阿弥自身の生涯を重ね合わせつつ堂本流の「読み」を示す。頻出する「性愛」の語に食傷気味になる面もあるし、氏の読みだけが正しいと言われるとつらいが、全体の色調とは別に個々の指摘については深く共感してしまう部分も多くある。個人的には〈頼政〉の項を最も面白く読んだ。『能楽タイムズ』（平成9年10月）に石井倫子氏による書評あり。

『大倉流小史』（大倉源次郎発行。A4判78頁。9月。非売品）

十五世大倉長十郎宣喜の十三回忌に際して編まれた大倉流の流史。「大鼓小鼓大倉家の歴史」（宮本圭造）「安政六年五月大坂檜村常舞台大倉六蔵宣義勸進能興行資料」（大谷節子）「近・現代の大倉流小史」（大倉源次郎）の他、大倉家年表、

系図グラフ、大倉流伝来の大鼓・小鼓胴の写真等を収める。

『能に憑かれた権力者 秀吉能楽愛好記』(天野文雄著。講談社選書メチエ116。B6判288頁。10月。講談社。一五五三円)

秀吉と能との関わりを「名護屋以前」「文禄二年肥前名護屋」「文禄二年禁中能」「能楽三昧の日々」「豊公能の新作」「秀吉の能楽保護」の六章に分けて説くが、序章として「武将の能楽愛好―秀吉まで」、終章として「秀吉以後」を置き、武将と能の関わりという視点から能楽史を概観できるしくみをとっている。記述はわかりやすいが内容は高度で、巻末の注に引用資料の原文を収めるなど研究上の便宜も工夫されている。最新の研究状況を一般読者にもわかりやすくという天野氏の目的は、十分達成されていると言えよう。

『能楽師』(アルメン・ゴデル著。小野暢子訳。B6判210頁。12月。ブリュッケ刊。二二〇〇円)

スイスの俳優・演出家である著者と観世流能楽師木月孚行氏との出会いと交流を描く。世阿弥伝書の訳(が再び現代日本語訳されている)や曲目の説明なども記されているが、そうした部分よりも、著者の目に映った稽古の様子や、著者が個人的に聞き心に留めた、能についての木月氏の言葉などが面白い。

論文

【資料紹介・資料研究・能楽史研究】

表章氏「『車屋本』新考(七)―第二章 鈔写車屋謡本(その六)―」(『能楽研究』21号。7月)は、奥書や墨印がなく形の上からは車屋謡本とは言えないものの、詞章の系統や筆跡など内容面からは車屋謡本に加えられる本や、内容面で車屋謡本の特色を継承している本のうち、まとまった番数が一括されているもの、具体的には、吉川家旧蔵車屋謡本系五番綴百番本・龍谷大学図書館蔵写本版本混在三番綴本・菊屋家旧蔵五番綴本の三種を扱う。多種多様な性質の曲を含む揃い本全体を精密に調査し、龍大本と菊屋本が関係の深い本であること、両本の編纂に鳥養道晰の子である鳥養新蔵が関与していたらしいことなどを明らかにする。龍大本(243番)と菊屋本(150番)所収曲については、「くる」の使用や直しの有無、車屋本系諸本に含まれる頻度などの特徴を付した曲目一覧を掲げるが、いつもながら少ないスペースにぎっしりと情報を詰めこんだ形で、かなりの覚悟と集中力をもって取り組まないと、表氏がそこに込めた情報すべてを受け取るのは難しい。

竹本幹夫氏「『能本三十五番目録』考」(『能楽研究』21号。7月)は、世阿弥晩年の作品の目録として扱われる『能本三十五番目録』の資料的価値について従来の諸説を検討した後、筆跡考証だけでなく、文書としての形状や書式などの書誌的な考証をも合わせて行い、同目録の性格を明らかにしたうえで、目録所収曲の大部分が「世阿弥引退前後を上限とする頃から、短期間の内に次々に成立したであろう」ことを言う。

『中世文学』42号掲載の同氏「『三道』執筆以後の世阿弥の作

風」(後述)と対になるもの。

望月郁子氏「世阿弥自筆能本における用字原理―非字音語のばあい・『布留の能』を中心に」は、国語学の立場からの論。自筆本「布留の能」における、仮名「ヲ・ワ・ウ・エ・イ」と「オ・ホ・ハ・フ・ヘ・イ・キ・エ」使用の実態を厳密に調査し、他の自筆能本や能楽論書の仮名遣いと比較考察。世阿弥自筆能本に見える用字法は一貫しておりしかも能楽論書のそれとは多少異なっていること、異体字を切り捨てて「二音一字体」の原則をとること等を明らかにし、そうした自筆能本の用字原理は「音を決めてもらわなければ謡えない」能の上演のための、意識的なものであったと推測する。同氏には「『トモアキラノ能』―非世阿弥自筆説補考―」(『日本文学誌要』55号。3月)もある。

近世能楽史の研究が充実していたのも本年の特徴。宮本圭造氏「南都禰宜衆の演能活動―もう一つの能楽史―(上・中・下)」(『芸能史研究』138〜140。7月〜98年1月)は、春日社における禰宜の位置づけや組織、その活動の諸相を押さえたうえで、そうした活動の一つとしての演能の歴史を明らかにしたものの。「上」では、南都の禰宜衆が、豊臣政権の時代に芸能集団として力を蓄えていった様子、禁裏での演能、女能や風流踊りへの参加、四座役者・町人役者との交流などについて述べる。「中」では、南都両門跡での演能について考察し、特に一条院では禰宜衆だけの演能・謡初・嘉例御祈禱の能が催されたこと、寛永年間を境に、禁裏での活動や女

能・風流踊りとの交流がなくなり、四座役者の傘下に入り武家式楽に組み込まれる様子、流儀所屬と並行して諸藩のお抱え役者になった彼らの、各藩での状況等を述べる。また、元禄二年の禰宜衆による仙洞能に關し、新資料によって詳細を紹介。この能で大夫を勤めた禰宜榊原次郎大夫の事跡についても詳述する。さらに「下」(10年1月)では、大坂・河内での勧進能への出演や素人役者の指導、地方村落での神事能への参加等、あらゆる面での禰宜衆の活躍について調査。明和年間を境に次第に衰微していく様子や、明治維新を機に職を失った禰宜衆のその後の動静にまで言及して終わる。多彩で活発な活動を繰り広げる禰宜衆の姿は非常に興味深かった。膨大な資料を博搜し厳密な考察を加えて南都禰宜猿楽の演能活動の実体を解明した宮本氏の手腕に敬服する。

同氏「紀州藩お抱え能役者の動向―和歌山県立文書館所蔵御役者の由緒書を紹介して―」(『フィロカリア』14号。2月)は、和歌山県立文書館蔵『紀州家中系譜並びに親類書書上』のうち能役者に関する分すべての翻刻とその解題、及び「紀州藩御役者の動向―役籍別の概観―」と題する論考のセット。

天野文雄氏「『関三与』追考―近世初期京都の能の数寄者の横顔―」(『野村美術館研究紀要』4月)は、同誌前号掲載の「近世初期京都能楽界の動向」の補遺編。前稿で紹介されていた『隔蓑記』記事に新たに知り得た諸資料を合わせ、関三与と鳥取藩との密接な関係を年表化して示す。新資料によ

り前稿で推定した関三与の没年は十八年後になり、『観世流仕舞付』の編纂時期も寛文年間から延宝八年頃に下がることになった。また、三与の父親で京の素人小鼓役者だった紺屋与五郎に関する記事の紹介と考察も行う。

樹下文隆氏「近世毛利家の能楽とお出入り役者―付、山田市之丞のこと―」(『近世文学俯瞰』汲古書院。5月)は萩藩の記録を丁寧な調査し、大名家にとっての能楽の意味や毛利家と越前松平家の「お出入り役者」をめぐる問題を考察。従来宝生佐大夫の弟子で俳人「里圃」であるとの説もあった山田市之丞が、北七大夫の弟子であることを明らかにもしている。各人の興味にもよるのだろうが、江戸時代の記録類を扱った研究の中には、そこで明らかにされる興味深い事実を知るために無味乾燥とも思える記述を我慢して読まねばならないというものも多い。が、この樹下氏稿は「お出入り役者」の定義を始め、資料の説明部分の文章が非常に読みやすく、面白く読むことができた。ただ、天和二年六月の「吉就家督祝儀囃」の記録に見える人名を貴重な資料として掲げるにしては、ただ人名を並べる形式は何とも見にくい。紙数の制限あっただろうし、本質的な問題でもないが、せっかくの資料なだけに、もう少し使い易い形で示してほしかった。

飯塚恵理人氏「高力種信(猿猴庵)著『龍口寺開帳記附録』に観る「仙助能」の芸態―広小路神明社「龍口」上演を中心に―」(『名古屋芸文化』7号。10月)は、高力種信が記した『廣小路辻能龍口之図』(翻刻と絵図の写真掲載)から読み

とれる舞台の様子や演出等、仙助能の実態を詳述し、五代目仙助他(龍口)に出演した役者についても簡単に触れる。

『鉄仙』にも能楽史関係の小論が二本。天野文雄氏「デビュウ当時の古七大夫―『時慶卿記』文禄二年十月十四日条の記事をめぐる―」(43号。5月)は『時慶卿記』から、文禄二年十月十四日毛利輝元邸で「七才ニ成大夫」が舞囃子を二・三番舞ったという記事を紹介。これが、「七ツ大夫」と呼ばれた喜多七大夫のもっとも早い出演記録になること、七大夫の行年をめぐる問題、金剛座加入以前の七大夫の活動の場や輝元との関係等についても考察する。また、表章氏「観世清孝の帰京の年月日」(47号。11月)は、明治維新の際に静岡に移住していた観世清孝の帰京が、明治八年三月三日である可能性の高いことを、観世文庫蔵の「観世家略譜草稿」資料に基づいて論ずる。

右の表氏稿からも明らかのように、すでに明治以降の能楽史についても判らないことが多くなり始めており、関係資料の早急な収集・整理が必要と言われている。油谷光雄氏(故人)の「過去帳・近代能楽史の人びと」(『能楽資料センター紀要』8号。3月)は、まさにそういった要請に応える仕事の一つといえる。近代の能楽関係者の生没年・享年、玄人役者の場合は役籍と流儀等をパソコン入力して打ち出したもので、師弟関係や芸名、役者以外の人物の職業等は、備考欄に示してある。典拠文献・参考文献も掲げてあり、信頼できる貴重な資料である。

この他、直接に能楽史を扱った研究ではないが、『融通念仏縁起』開板に至る事情を考察した内田啓一氏「融通念仏縁起明徳版本の成立背景とその意図」(『仏教芸術』231号。97年3月)も本年の収穫。明徳版本の詞書筆者には、尊道・堯仁・覚増の三法親王や公家衆、高僧などが名を連ねるが、彼らはみな二条家に関連の深い人物であること、また開板者である成阿が二条良基に認められた連歌師であったことを指摘し、その成阿が二条良基の追善のために、関係の深い人を選んで詞書を依頼し『融通念仏縁起』を開板したと推定する。そのこと自体も興味深いが、縁起を取り巻く文化圏が世阿弥を取り巻く文化圏と重なる点が注目される。

また、ごく短い資料だが、京都府立丹後郷土資料館の秋季特別展パンフレット『丹波・丹後の大般若経』(10月)の34頁「27 大般若経」の項に、同経に書き込まれた、応永22年と思われる猿楽上演記録が紹介されているので、併せてここに記しておく。

【作者研究・作品研究】

『中世文学』42号(6月)には、三宅晶子氏「世阿弥の物まね論―舞曲舞の成立―」と竹本幹夫氏「『三道』執筆以後の世阿弥の作風」、世阿弥の能作を扱う論が二本載る。三宅氏稿は、歌舞能における定型的な舞の獲得過程を、曲舞の作詞法の分析を通じて論ずる。舞踊的な所作を生み出すにはそれなりの言葉が必要なのだというところから説明を始め、和歌

的修辞や比喻表現が抽象的な動きと結びついて余情表現を生み出すしくみを明快に分析してみせる。竹本氏稿は世阿弥伝書や自筆能本に見える世阿弥座関連曲を時代・風体別に分類して一覽し、世阿弥晩年期の能作の実態を考察するスケールの大きな論。世阿弥座関連曲のうち『三道』以前成立の29曲を除く大部分が世阿弥晩年の作であることを確認するとともに、その晩年期の世阿弥の作風が「既成の様式を別風体に応用した新風体」だったことを示す。さらに世阿弥晩年の複合的作風は後代に広く受け継がれたわけではなく、禅竹・音阿弥以降の能はむしろ『三道』に示された様式の安直な模倣が多いことを指摘する。この他、山中玲子「世阿弥の女体幽霊能と『ワカ受ケ』の機能」(『国語と国文学』11月)も、世阿弥の作風に関する論。女体の幽霊に舞を舞わせるために世阿弥が案出した仕組みの一つとして「ワカ受ケ」を捉える。

個別の作品研究に移る。西村聡氏「〈錦木〉喜びの舞訛伝」(『国語と国文学』1月)は、同曲のシテが舞う〈男舞〉を「僧の回向により妄執を脱し永遠の恋を成就した喜びの舞」とする従来の諸注釈に異を唱え、このシテは生前思いを達しているとの解釈を示す。恋の成就是生前の出来事で、その喜び、遂げられた恋の思い出への執着ゆえに成仏できないと考える。そうしたシテの造形に〈井筒〉との共通点を見る視点が面白かった。

後藤和也氏「能〈井筒〉試論―「読み」の可能性をめぐって―」(『楽劇学』4号。3月)も〈井筒〉を扱う。シテの女

の最も回帰したい昔が、夫婦の危機を乗り越えた時(サシ)ではなく、和歌を詠み交わして結婚した幸福な昔であるという指摘などは面白かったが、〈松風〉と〈井筒〉を比較して〈井筒〉の移り舞は物まねの舞だとする論は、理解できなかった。また、「移り舞」のことや舞アトの人称など様々な説の存在する部分については注に多数の論を引いているが、それらの論をどう捉え後藤氏自身の論とどう関わらせているのかがまったく示されていない点も、不満が残った。

西村聡氏「『船橋』に自責の鬼が物語ること」(『金剛』148号。1月)と、徐偵完氏「『船橋』の改作と変遷」(『名古屋芸文文化』7号。10月)と、〈船橋〉についての論も二本続いた。徐氏の論は、上掛りと下掛りの本文を比較して読み込み下掛りの方に鬼能らしい一貫性を認めるところまでは説得力があると思うが、田楽能から世阿弥作〈船橋〉への変遷は、それとはまた別の問題ではないだろうか。碎動風の「人目を化かす故実の分力」(『拾玉得花』)を「まことの冥土の鬼は登場せずに、登場しているような錯覚を観客に与えること」と解釈(誤解と思う)したうえで、下掛り系の本文を根拠に、鬼の登場する田楽版〈船橋〉から登場しない碎動風の〈船橋〉への改作を考える、といった論の運びには納得できなかった。西村氏も世阿弥以前の同曲の「古風」について触れるが深入りはせず、シテの成仏する結末は世阿弥による改作の可能性があること、古風において作り上げられた物語が改作〈船橋〉にとっての本説だったと思われること等を指摘す

るにとどめている。シテが執着するのは「すでに覚えた快楽の味」であるという理解は、氏の言う「『忠度』『井筒』『錦木』など、思い出に執着する亡霊たち」とも通じるのだろう。〈錦木〉の場合と同じ考え方なのにすっきりと納得できないのは、〈船橋〉が古作の影を引きずることにこちらが囚われすぎているせいだろうか。

世阿弥作品を扱った論文には、この他、天野文雄氏「世阿弥の〈千寿〉の輪郭―現行〈千手〉以前の「千手の能」―」(『金剛』149号。5月)、石井倫子氏「能の中の新古今―名歌・名句の言葉をとること―」(『逢坂物狂』の作能法」(『国文学』11月)、西村氏「〈葛城〉の神体」(『北陸古典研究』12号。10月)等があった。天野氏稿は「煙見千寿」「昔千手」の詞章を再検討し、世阿弥作〈千寿〉を、恋慕をテーマにした夢幻能と推定したうえで、禅竹は世阿弥の〈千寿〉を意識しつつ、同じ人物を主人公としたまったく別趣の能を作ろうとしたのだろうと結論づける。詞章の検討自体には納得するのだが、〈井筒〉にも似たそれほどの完曲〈千寿〉が『自家伝抄』に記録され得る時期まで上演されていたのだとしたら、もう少しその痕跡が残っていてもよいような気がする。石井氏は、歌枕の持つ和歌的・文学的イメージの中で現在と過去とが交錯しそこからある情趣が生まれる〈逢坂物狂〉の作詞法が、新古今的な本歌取りの手法に非常に近いことを指摘する。西村氏稿は〈葛城〉のシテが女体で現れることについて、男体の古曲からの改作、能以前に葛城神女体説が在った、天照大

神のイメージが重なる、等の諸説を退け、たとえ女体説が先行したにせよその「女体をどう具体化し、必然とするか」は、「五衰三熱を宿命とする神の本質を描く」という本曲の主題と深く結びついた、能作者の新たな主體的な選択であったとする。世阿弥以後の作品を扱ったものの中では、落合博志氏「能と『法華経』〈芭蕉〉について」(『国文学解釈と鑑賞』3月)が、学ぶところが多かった。『法華経』と中世文芸」という特集の一部で、能〈芭蕉〉が広義の法華経注釈における実相観の影響下にあるものと確認した後、芭蕉という素材が「草木成仏―諸法実相」というテーマとどう関わるかを検討する。芭蕉は、室町時代には「仏典や和歌における伝統的な無常のイメージから踏み出し、風に破れるさまも一つの風情として賞美されていたこと、特に古寺や草庵の点景としての清閑な情趣が好まれていたこと」を、多くの例を挙げて示し、そうした時代のお好みが能の素材としての選択にも影響したであろうこと、〈芭蕉〉のすべてが法華経説に還元されるわけではなく、むしろ法華経に関わらない部分に文学的な魅力があること、それはまた、同じ禅竹作の〈定家〉に見える手法とも通じていること等を指摘する。

川添房江氏「源氏能とは何か―謡曲『半蔀』のドラマトゥルギー」(『へみやび』異説 5月)は、川添氏がすでに「源氏物語の人物構造―六条御息所と謡曲『野宮』のドラマトゥルギー」で鮮やかに分析してみせた「源氏物語」の多彩な人間関係、男女や親子の連鎖する人間模様を可能なかぎり

そぎ落」とす「源氏能」の方法が〈半蔀〉にも当てはまることを示す。さすがに、最初に読んだ〈野宮〉の論ほどの衝撃は受けなかったが、気鋭の源氏学者が、どこから頼まれてちよっと謡曲に手を出すというのではなく、本気で「源氏能」の解明に取り組んでおられるのだということがよく判った。

内山美樹子氏「『烏帽子折』をめぐる」(『芸能史研究』138号)は、能、幸若舞曲、浄瑠璃の「烏帽子折」それぞれの成立事情と、三世紀に亘る三者の交渉史の考察。浄瑠璃「烏帽子折」の成立事情やその後の展開等については教えられることが多かったが、能に関しては納得できない部分もいくつかある。たとえば『看聞日記』に見える「九郎判官東下向」を〈烏帽子折〉の古名と認めることには疑問を呈し、「原形」という表現が穏当であろうとしながら、「九郎判官東下向」のことを語るのに〈烏帽子折〉の構成や詞章を用いるのは危険ではないだろうか。内山氏が言われるように永享四年段階での「九郎判官東下向」に熊坂は登場しなかったとの推定が成り立つのなら、同様に、今の〈烏帽子折〉には書かれていない「元服」という語句を「九郎判官東下向」は持っていたと考えることも可能だろう。が、こうした細かい不満や疑問はあるにしても、広い視野に立って芸能の変遷全体を捉えようとされる姿勢は見習わねばならぬものと思う。

『観世』の作品研究の特集は味方健氏〈逆矛〉(1月)・樹下好美氏〈千手〉(6月)・須田悦生氏〈山姥〉(9月)の三曲。

味方氏稿は、瀧祭明神と龍田との関係・国造りの矛を龍田山に納めたという説・龍田姫を瀧祭明神の和光相と見る立場等々につき、中世神道論の教義によって、解明していく。樹下氏は、世阿弥風の修羅物における詩歌管弦の代わりに、「千手」においては恋が風雅の彩りとなっているとする。また、シテには舞を舞わせ、ツレの方に性格付けを施すという作風が、同じく『平家物語』を素材とする〈小督〉とも共通することを指摘する。須田氏稿は〈山姥〉に関する先行諸説を整理し、本曲の舞台となる越後上路近辺に残る山姥伝承にも触れる。

『鍔仙』に載った作品研究関係の論は、八島正治氏「観阿弥の面影」(3月)、三宅晶子氏「能の中の女性像——〈熊野〉の場合——」(9月)、西村聡氏「物語話型の『三年』と〈井筒〉」(10月)。八島氏稿は〈自然居士〉〈卒都婆小町〉の会話性の高い部分を世阿弥による改変と考える伊藤正義氏の説に対し、両曲ともほぼ観阿弥作のままとする。また〈求塚〉にも憑依現象の名残など、観阿弥原作の面影を見る。三宅氏は〈熊野〉の人物造形を考える際、恋愛感情を取り上げ強調するのは誤りであるとする。西村氏稿は『国語と国文学』に書いた〈錦木〉の論文とも関連。物語の話型の中では、男女が相手を持つのは「三年」で、それ以上は待たなくても良いことを指摘。この話型を利用した〈井筒〉は、生前「待ち得た」女として、その待ち得た思い出を永遠に追慕する構想であるとする。

【能楽論研究】

石井倫子氏「能と蹴鞠と兵法と——伝書に見る身体——」(『国語と国文学』74巻11号。11月)は、能・蹴鞠・兵法の三つの伝書で説かれる身体のある方を詳しく検討することにより、これらの芸道が身体レベルで深く関わりあっていることを明らかにする。世阿弥の「女体」は、彼が幼時に収得した蹴鞠の基本フォームから影響を受けている可能性が高いこと、禅鳳時代に動かない身体を志向し始めた能が、蹴鞠から離れ兵法に近づいていくこと、兵法と能が身体面で互いに影響しあっていること等、興味深い指摘が多い。

松岡心平氏「世阿弥の花——花から風へ——」(『国文学』4月)は、世阿弥の「花」への思いが四十歳代を境に変わり、後期世阿弥においては「花」に代わって「風」が重要なコンセプトになることを言う。

田口和夫氏「『転法輪秘伝』と世阿弥・虎明——芸能の言葉——」(鍔仙。2月)は芸能の場における言葉の問題について、説経師の心構えを説いた『転法輪秘伝(説法秘条)』と、世阿弥や虎明の伝書記事との間に見える共通性を指摘し、能や狂言の芸の変質についても説く。

右の三氏の論とも、能楽論をより広い中世の思想・宗教や言説の中において見ようとする姿勢が共通している。この年には成果が発表されていないが、詩経や禅関係の言説との関連も、重田みち氏により進められている。一時、能楽論研究

が煮詰まっているようにみえた時期もあったが、こうした新しい切り口により、今後多くの成果が期待される。

【演出研究】

高桑いづみ氏「オロシ考―舞事の形成序説―」（『芸能の科学』25号。3月）は、能の舞事に見られる「オロシ」が実は「手」と呼ぶにふさわしい特殊な譜を持つにも関わらず室町末期以降オロシと呼ばれるようになるのはなぜか、オロシ成立のいきさつをさぐる。序やカ、リの比重が軽くなるにつれ序のオロシ（こちらが本来）の存在意味も小さくなり、新たな見せどころとなった舞中に序のオロシを転用したり、序のオロシを解体して他の舞のオロシを創ったのだらうという、高桑氏の推定には説得力がある。舞のオロシは江戸初期頃急速に形を整えたいとの指摘や、笛方の裁量で数ある手の中からオロシを選んだため現在も流儀差が生まれたとの想定も魅力的だが（そして正しい推測なのだらうと思うが）、その根拠として氏が掲げる伝書類の記事については、伝書や付類の用語がそれほど厳密だったのかという疑問も残る。「手」と「オロシ」の呼称の違いも、伝書（の執筆者）の書き癖による部分が意外に大きいのではないか。一般にオロシという言葉が使われるようになっても本によつては平気で「手」という表現を使っていることもあるだろう。伝書に見える呼称というのは実はかなり揺れており、歴史的な変化として一直線に並べることは難しいことが多いように思うのだが。

米田真理氏「『習の能』小考―金剛流・喜多流における老女物の扱いをめぐる―」（『名古屋芸能文化』7号。10月）も、面白かった。江戸時代初期の喜多流の習は金剛流の影響を受けていること、老女物と言われる諸曲のうち〈関寺小町・鸚鵡小町・卒都婆小町〉を重視し〈桧垣・姨捨〉は所演曲としなかった点でも両流は一致すること、ところが喜多流三世祐山が綱吉に命じられ自ら工夫して演じたことなどにより、〈桧垣・姨捨・木賊〉等本来上掛り系だった能も喜多流の新しい習として組み込まれていったこと等を、資料から跡づける。ある流派が何を習いとし、それはどういう事情によるのかということは、習事を考える際の根本的問題の一つだろう。続考にも期待したい。

山中玲子「作り物への中入と変身をめぐって」（『東京大学留学生センター紀要』7号。3月）は、世阿弥・禅竹時代のシテが作り物に中入する諸曲を検討し、作り物へ中入してシテが大幅に着替え後場で再登場するという能の趣向が、世阿弥時代には存在しなかったのではないかと考える。また、作り物自体の意味を変貌させる世阿弥の工夫を明らかにし、禅竹時代成立の〈三輪〉においてシテが作り物の中で風体を変える工夫が、作り物内での変身の先蹤となったかと推定する。〈三輪〉と〈龍田〉との前後関係や〈龍田〉の改作問題にも触れる。

山中「〈安宅〉の小書『延年之舞』の成立経緯―小書演出をめぐる考察（四）―」（『能楽研究』21号。7月）は、古伝書

類に見える「延年の舞」は〈安宅〉で舞われる常の舞の名称だったことを示し、それが、〈男舞〉全体が周辺の舞をも含みながら類型化するなかで次第に習事化していった過程を跡づける。また、現在特に重い習事である宝生流の「延年之舞」が、江戸時代中期にそれまでの演出を利用しながらもまったく新しく工夫されて成立した事情を述べる。

『鍔仙』にも演出関係の論が三本。高桑いづみ氏「とうとうたたり」と雅楽の唱歌」(1月)は、寺院に伝承された、特定の楽器や旋律に結びつかずゆったりと声を引いて謡う唱歌から「とうとうたたり」が発生したのではないかとする。「歌謡としての唱歌」という視点は面白かったが「たりたん」と「とうとうたたり」がどう似ているのか、よく判らなかった。小田幸子氏「『鉄輪』の夫」(4月)は、祈禱台の作りの上に、男の烏帽子を載せる演出が後発であることを指摘、実はワキツレ本人が後場まで舞台に残っていたのではないかとする。岩崎雅彦氏「烏帽子をかぶる女―男装の意味論―」(12月)は、女の烏帽子姿や長髪に烏帽子を被る放下の姿は本来、現代の我々が感じるよりもはるかに強く、異形としての印象を与えたであろうことを言う。

齊藤恵子氏「貝塚願泉寺蔵慶安三年筆金剛流〈関寺小町〉仕舞付」(『金剛』150号。9月)は、能楽との関わりの深い願泉寺に伝存する〈関寺小町〉の仕舞付の翻刻と解説。解説では、他の型付と比較して本仕舞付の特徴を述べる。

能面関係の論考も、広く演出に関わるものとしてここに紹

介する。齋藤望氏「面打井関の系譜」(『彦根博物館研究紀要』8号。12月)は、「面打井関の家系図や、面裏に残された細工印などを詳細に検討し、彼らが鞍打や旗本の井関と同じ一族であることを明らかにする労作。堤由希子氏「野村美術館所蔵の能面」(『野村美術館研究紀要』4月)は、野村財閥の創始者野村徳七(1878~1945。得庵)の購入した面についての調査報告で、得庵と能の関わり、二四世観世左近との交流についても触れる。

【狂言】

田口氏と橋本氏の業績が単行本としてまとめられ、相次いで出版されたことは、この年の狂言研究のトピックとしてしてもう一度確認しておいてよいだろう。その分、雑誌掲載論文は数が少なかったような印象を受けた。

林和利氏「演博蔵『狂言古図貼交屏風』の素性と価値」(『演劇研究』20号。3月)は、屏風に貼られた狂言舞台図十枚について、曲名や装束・演出の特徴などを詳しく吟味する資料研究。曲名に関する従来の誤りを正す他、描かれているのは大蔵流系統の狂言であること、式楽として様式が固定する以前の、扮装や小道具などがより写実的だった狂言の姿を伝えていること(但し、氏が掲げた〈宗論〉の法華僧と念仏僧の頭巾の絵に関する説明は、逆ではないか)、制作年代は寛永初期と推定されること等を示す。いろいろと勉強になり面白かった。

関屋俊彦氏「茂山久蔵英政と鏡師青家」(関西大学『国文学』75号。3月)は、茂山千五郎家八世の久蔵英政が『茂山家過去帳』の記す通り青酒造之介であり、墓も大谷本廟に在ること、青家は代々禁裏御用の鏡師だったこと等を突き止め、そこから、本職は鏡師である青姓の者が代々「茂山」の芸名を名乗り、狂言師として御所御用を勤めていたのではないかと推定する。

『鍔仙』6月号の、永井猛氏「宇佐神宮の大蔵流狂言台本―宝暦鳳竹本のこと―」は宇佐神宮に所蔵されている狂言台本四冊の紹介。能楽研究所に在る「宝暦鳳竹本」一冊ともとは一揃いだった本で、宮島に残る大蔵流の「伊藤源之丞本」と同系統とのこと。

作品研究関係では、稲田秀雄氏「舞狂言覚書―職能民と草木虫魚」(『山口県立大学国際文化学部紀要』3号。3月)が面白かった。従来能のパロディとしてのみ捉えられることの多かった舞狂言を取り上げ、構想・表現の特色を考察、「職能民の生業に対する強い関心を基に形成された狂言だった」と結論づける。舞狂言全体を芸能者を含む「職能民の系列」と「草木虫魚の系列」に分け、前者は職能民としての生業がそのまま苦患に転じるという構想をもち、後者は前者のさるなるもどきとして、職能民や天敵に捕らえられ殺される現実そのものが苦患である世界を描くとする図式は明快。「職能民の系列」において特に目立つ「物尽くし」の趣向が「職能民に関わる語彙の類聚」への狂言役者の関心の強さを示して

いるという説明にも納得させられた。

須田悦生氏「『智入り物』の狂言をめぐる―天正本を中心に―」(『中世文学とその周辺』所収。溪水社。3月)は、智入り物というジャンルを取り上げ、天正本に見える基本パターンを整理し、以後の智入り物をそれら基本パターンの展開・変形形とする。

林和利氏「狂言における因幡堂の位相」(『名古屋女子大学紀要』43号。3月)は、なぜ因幡堂が狂言にしばしば登場するのか、狂言と因幡堂との間にどのような強いつながりがあるのか、を考察する。中世の因幡堂が貴賤を問わず幅広い信仰を集め親しまれた寺院であったことや芸能上演の場でもあったことなどは林氏の指摘の通りだと思うが、そのような場所なら他にもあろう。因幡堂の僧が狂言の成立に関わった可能性についても、氏自身の言われる通り仮説の域を出ないとなると、結局、「なぜ因幡堂なのか」という疑問は残ってしまうように思われる。今後とも多方面からの検討が必要だろう。

地方の狂言をめぐる研究も、二篇が管見に入った。山中華氏「馬瀬狂言の研究」(『皇學館論叢』30巻6号。12月)は、三重県伊勢市馬瀬町に伝わる馬瀬狂言の芸系が、野村小三郎信定(玉泉)の指導を受けた山脇和泉流であることや、玉泉の死後は辻能の仙助一座の演目を取り入れていることなどを、資料から明らかにする。仙助座が地方を巡業し番外曲を演じながら無意識に芸の流通を行っていたという指摘も面白かつ

た。また、須田悦生氏「駿河徳山の狂言をめぐる」(『伝承文学研究』46号。3月)は、静岡県指定無形民俗文化財「徳山の盆踊り」の中で歌舞伎踊りの要素の濃い「ひいやり踊り」などとともに演じられる狂言についての考察。能舞台で上演される狂言とは異なる点の多い伝存曲は、歌舞伎踊りの芸能集団が群小流派の曲を取り込んだ結果かと推定する。

山内洋一郎氏「船頭殿こそゆうけんなれ(狂言歌謡)」(『文教国文学』35・36合併号。6月)は国語学の方面からの論考。〈鞍猿〉の「猿歌」に見える「ゆうけん」が諸注の言うような「勇健(勇敢で力が強い)」ではなく、おおらかでゆったりとした様、重々しくて権威のある様を示す「幽玄(ユウケン)」だろうとする。

以上、平成九年一月から十二月までに発表された能楽研究の成果について概観してみた。重要な論考を見逃していたり、取り上げたものについてもこちらの無知や誤解によって誤った紹介になっているかもしれないことを恐れている。大方の御叱正を仰ぎたい。

展望を書くといつも痛感することだが、能楽研究所には能狂言関係の抜き刷りやコピーが、あまりにも揃っていない。外部からも論文についての問い合わせがあるが、ほとんど対応できない状態である。能楽研究所に行けば資料は見られるが先行論文は集められない、というのでは情けない。こちらでも収集に努力するつもりだが、執筆者の方々にも、是非協

力していただきたいと思う。